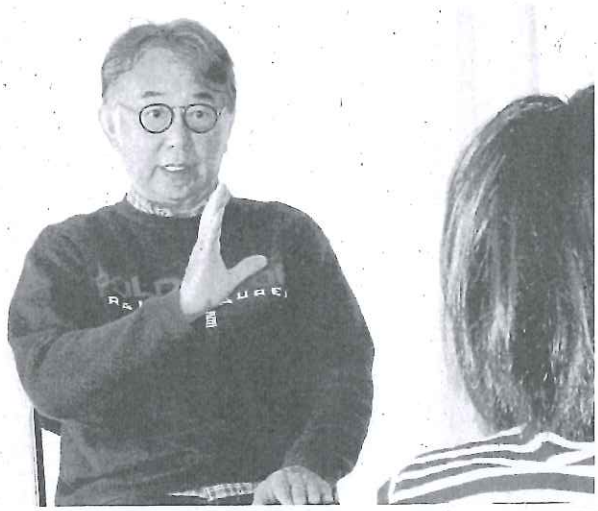
プロの前座で話芸披露

佐世保 放送作家・海老原さんが子どもたち指導

子どもたちがプロの落語家の前座として高座に上がり、地元の方言や固有名詞をちりばめた創作落語で客席を沸かせる「佐世保かっちぇて落語会」が、佐世保市の名物となっている。主宰するのは数々の人気テレビ番組を手掛けた放送作家、海老原靖芳さん(65)＝同市石坂町。台本執筆や話し方の指導など全てに関わり、古里に笑顔を広げている。【綿貫洋】

あす18回目の「かっちぇて落語会」

「海きらの水槽でものすごいスピードでイカを追いかけているイカの名前は？」「アオリイカだよ」▽「キリンの名前の由来は？」「ビールが好きだから」――。10月下旬、市内の公共施設で子どもたちが落語の稽古(けいこ)に励んでいた。正面に座る海老原さんは、子どもの目をじっと見据え、時にうなずいたり笑ったり。語り終えて「よーく覚えてきた」と褒める海老原さんに、子どもたちもほほ笑んだ。



落語の稽古で子どもにアドバイスする海老原さん

落語会は2010年に始まった。きっかけは2004年に同市の小学校で起きた同級生殺害事件。「コメディー・お江戸でござる」「ドリフ大爆笑」などの台本を書いてきた海老原さんは、故郷が「怖い街」と思われることがつらく、子どもたちを笑顔にする方法を考えるようになった。

模索中の10年1月、コント赤信号のメンバーで親友の小宮孝泰さん(62)から同市での落語会開催を打診され、子どもを出演させたいと考えた。小宮さんを介して賛同してくれる落語家を探し、難航の末、柳家喬太郎さん(55)が応じてくれた。第1回の落語会は10年8月に実現し、600席が完売する大盛況となった。

その後は取り組みに共感してくれる落語家も増え、春風亭昇太、林家正蔵、立川志の輔――らが出演し、開いた落語会は17回に上る。海老原さんも落語にのめり込み、現在は小学校3年生から高校生まで計7人を指導する。古川咲弥さん（佐世保高専1年）は「人を楽しませるのがうれしい」。小学生の頃は人前で話せなかった男児が、中学では弁論大会で上位入賞を果たすなど成長している。「落語経験者の層が厚くなっている。OB、OGを集めた定期的な落語会をやってみたい」。海老原さんの夢はさらに広がっている。

◇　◇

18回目の落語会が2日午後4時から、同市光月町の佐世保コミュニティーセンターである。出演は瀧川鯉昇らプロ3人と子どもたち。一般指定席2500円など。残席わずか。実行委員会（0956・32・0888）。